



## 教職員支援グループ(研究研修)より

### だれもが研修(2)「特別の教科 道徳」

今年度から小学校で、来年度からは中学校で全面実施の「特別の教科 道徳」について、全小中学校全教職員を対象に標記の研修を隔年で実施しています。「考え、議論する道徳」を目指し、授業改善に向けた具体的な取組を学ぶことにより、教職員個々の指導力の向上を図ります。今回は、これまでの龍崎先生の講話からそのエキスを紹介します。



講師：岐阜聖徳学園大学 教授 龍崎 忠 先生

道徳の「授業改善」について  
「うれしい道徳」を実現するために

道徳の目標は、児童生徒の□□□を養うものである。□には何が入るでしょう？それを言い換えると・・・。

指導観を明確に、道徳的な①判断力②心情③実践意欲と態度を育てること。以前の目標とはどこが違っているでしょう・・・？

#### Q 道徳科は何をしている授業？

「道徳的判断力」「道徳的心情」「道徳の実践意欲と態度」→「心」でもあり、「思考」でもあり、「行為」でもある。言い換えれば人間の存在そのものを絶えず問い続けるのが道徳科。「してよいこととわるいことの勉強」「幸福になる／幸福にするための勉強」

#### Q どう進めるとよいの？

- 道徳科の学習・道徳的価値についての理解を基に
  - ・自己を見つめ
  - ・物事を多面的・多角的に考え
  - ・自己の生き方についての考えを深める



#### 「考え、議論する道徳」

「考える道徳」「議論する道徳」そしてさらにもう一度「考える」→「考えて、議論しつつさらに自分自身でいっそう考えを深める」学習をする→「主体的・対話的で深い学び」へ

#### Q 道徳科の授業、どうつくるの？

- 「資料の分析」を大切に・・・資料を読み込んでみましょう。
- 「発問の分析」を大切に・・・次の点を考えてみましょう。
  - 1 問題把握の発問（主に導入）
  - 2 教材と向き合う発問（主に展開前段）
    - ・共感的な発問・・・主人公はどんな気持ちだろうか、何を考えているだろうか。
    - ・分析的な発問・・・○○と△△の考えにはどんな違いがあるだろうか。
    - ・投影的な発問・・・自分なら主人公のようにできるだろうか。
    - ・批判的な発問・・・このような結末でよいだろうか。
  - 3 考えをいっそう深める発問（補助発問、切り返し、揺さぶり）
    - ・○○さんの考えをどう思うか。逆に考えてみたらどうだろうか。
    - ・先生は○○だと思うけどどうだろうか。他にもっとよい解決方法はないだろうか。
  - 4 自分をみつめる発問（主に展開後段）
    - ・同じような経験はないだろうか、その時を振り返るとどんなことが言えそうか。
    - ・あなたは主人公に似たところはないだろうか。



本研修では、グループに分かれて展開案を作りながら模擬授業を行うことを通して「子どもと一緒に考えて考える」道徳の授業を目指していきます。評価についても、龍崎先生とともに研修していきます。

#### 《教育総合研究所にかかわる、9・10月の行事》

9月10日(月) ほほえみ教室始業式  
9月28日(金) 第4回教育相談研修会

10月2日(火) 人権・同和教育幹部研修会  
4日(木) 第2回大垣市少年支援員研修会  
15日(月) 第2回研究部長会  
22日(月) 第3回教科別研究会(小中合同)

## 児童生徒支援グループ (教育相談)より

### 「つながり」を考える

不登校で悩む児童生徒や保護者となかなか『信頼関係』がつかれない、『つながり』がもてない、という話を時々聞きます。要因は様々ではありますが、電話連絡や家庭訪問をしても話がかみ合わず、全く解決の糸口が見えてこない状態になってしまうこともあります。『つながり』を大切にしなければいけないのに、『つながり』が築けないという現状を少しでもよりよい方向に進めるためにも、まずは『つながり』について考えてみましょう。

「人は一人では生きていけない。」と、児童生徒に語りかけることはありませんか。確かに昔は、地域で各家庭がお互いに物々交換などをしながら助け合う環境があり、地域や家族での『つながり』を大切にしていたことから「一人では生きていけない」と言えました。しかし、現代社会においてお金というものがより生活を媒介する手段として浸透していくと、極端な話お金さえあれば、生きるための必要なサービスは受けられるようになりました。生産者と消費者の関係はありますが、現実、誰とも深く付き合わず、一人で生きることが選択可能な社会に変わってきたとも言えます。「だから、一人でも生きていけるんだ」と言いたいわけではありません。「一人でも生きていくことができ  
てしまう社会だから、人と『つながる』ことが昔より  
複雑で難しくなっているため、人との『つながり』を  
大切に生きていかなければいけない」と言いたいのです。昔は損得を超えて人を全面的に包み込むような温かみや情愛の深さを受け継いでいる面があったかもしれません。しかし、今はみんな同じような職業や生活形態を前提とした共同体の作法では、親しくする『つながり』を維持することはできない状況にすっかり変わってしまったと考えられます。現在の児童生徒や保護者と『つながり』がもてない要因とも言えるのではないのでしょうか。

誰でも「人と親しくなりたい」「人と一緒に楽しみたい」と、『つながり』を願うものです。しかし、それを求めることで児童生徒や保護者、先生方が傷ついたり、追い詰めたり、追い詰められたりする状況に陥ることがあります。だから『つながり』について、人と人との距離感をとってどんな目的で連絡や訪問をするのか、  
気の合わない人とでも一緒にいられるように  
どんな作法を提案し、どのように指導するのか、具体的な対策を考えなければいけません。

### ☆「つながり」を築くために

私たちは『つながり』の中に何を求めているのでしょうか。『つながり』には2種類あります。

- ① 学級の仲間と関わらせるため、担任の先生との関係づくりのためなど、人との『つながり』自体を目的とするもの
- ② 登校させるために、教室に入れるようにするためになど、ある目的を達成させるために必要な『つながり』

この2つの『つながり』は実際の生活において重なっている場合が多いです。

①の『つながり』自体を目的として、先生方はこれまでも電話連絡をしたり、家庭訪問をしたり、関係づくりをしてきたと思いますが、この『つながり』が難しいと感じる先生もいらっしゃるでしょう。児童生徒とのつながりを求めて、保護者とのつながりを求めて、どのように『つながり』を築くとよいのか。それは、個に関連した「話題」を集めることです。児童生徒なら、個の生活に応じて興味・関心があるもの。保護者は普段のお子さんのがんばりや、家庭での様子を聞いた上でのよさや変化。さらに、保護者が努力していることや子どもの今後についての考えなどつかみましょ。特に保護者の努力や考えは受け止め、共感し、認めることが大切です。

②は①の『つながり』をもとに、目的を達成させるため、いつ、どこで、誰が、どのように関わり、何を  
するか、必要な『つながり』を広げることです。よく、「連携を密にして…」と言いますが、関係者（職員、時には一部の児童生徒、保護者、関連機関の方々等）との共通理解を図ることです。連絡等をする中で、今その児童生徒にとって必要な『つながり』をつくりましょ。そして、その具体的な対策を考える場がケース会議です。

### ☆「つながり」を生かした具体策を

児童生徒が個に応じて不登校になる要因は様々ですが、その中で関連するキーワードはA家庭環境、B学校生活、C本人自身の3つです。簡単に言うとAは家庭の教育力低下に関わる様々な出来事。Bは学校生活上でのトラブル。Cは本人自身の自信の喪失などと言えます。要因が何なのか、漠然とでもよいのでつかんでおき、ケース会議で個に応じた具体策を練りましょ。1学期の欠席日数、遅刻の登校時刻、連続欠席日数、家庭環境の変化、学校生活上で壁になること（人・もの・行事）他機関との関わりなど、情報共有をした上で、②の『つながり』を生かした具体策を立てましょ。始業式には登校できるのか？始業式が登校できなかったら？何曜日なら登校できるのか？運動会(体育大会)はどうするのか？家庭訪問をどうするのか？などを検討してましょ。

### 参考文献

- 総合教育技術 9月号(小学館)
- 菅野 仁 著「友だち幻想」(ちくまプリマー新書)